



ハイセイコーと大場さん

皐月賞はいかがでしたか。公営から来た不敗のハイセイコーの人氣が爆発して、競馬場へ出向いた人は、混雑で大変だったと思います。ハイセイコーが弥生賞で初めて姿を現わした時に、パドックでおこったため息や、拍手や歓声は、忘れることはできませんが、でも公営の人物が、中央のファンに暖かくむかえられるなんて嬉しいですね。それでも、パドックを出ていく頃には、「ハイセイコーなんかには敗けるな!」といったような言葉が聞かれました。それらの人々が、その後の強さを見て、うまく好きになれたかどうか心配です。いつだってそういう乗り遅れた人間がいますからね。あのシンザンでさえ何となく馴染めなかった人もいます。僕は幸いに皆さんより一足先に、府中の厩舎で見る機会があったので、その時受けた衝撃の強さに

一目惚れしました。あのきれいともいえない馬房がまるで王様の部屋のようになっています。そこにこの世の物とも思えない見事な身体が君臨していたのです。ですから弥生賞のパドックでいれ込んだ姿に、がっかりしました。あの気合は、ヒンドスタンの仔みたいだった。それにどうして同じロックフェラを父にもつのに、ゲイタイムの仔は品がよくて、脚に遣伝の四白がでるのに、チャイナロツクはあまり品がなく、その上自分の栃栗と見事な四白を仔に伝えないのでしょうか。

便な中山まで、出向いたわけですから、思いがかなったのはつかの間、あとは右往左往するんですが、スタート直前の頃は人波ができて、その圧力は柵寄りの人々にとつては、胸のつぶされる思いなのです。背の低い人や女の人は馬もコースも見られず、ただ人波にもまれて空を仰いでいるだけで、それはとても怖い思いです。人垣の外へ脱出したくてもそれは到底無理でした。柵寄りの人達は苦しめてついに外へ出たのです。ぼくは友人とこの中に紛れ込んでいたので事情をよく知っていました。ところがあとで聞いた話ですが、TVの解説者がそれを非常識だというんですね。公の機関でそんな体裁のいい発言をする事に僕は腹立たしくてしかたがなかった。ハイセイコーみたく馬場へ行ったファンが、苦しませたあの行動が、はた

して馬を愛していない者の態度だったかどうか、優駿の読者に判断してもらいたくて、僕はこの欄を拝借しました。

あの発言は鋭敏な馬を思っているものでしょうが、それなら客扱いにならない競馬会の鈍感さを、皮肉った方が良かったかもしれない。無駄話が多くなってすみません。実は、皐月賞の行なわれる頃、この号が印刷中なので、ハイセイコーがどんな結果になるかわからないんです。スプリングを勝つことは、「ときの馬」の資格として充分ですが、今年の場合は、同じ馬が皐月賞も制す可能性が高いし、毎日報道されるニュースと、この訪問記がだぶつてもよくないので、今回は、待望の春のクラッシュクンズを一人で運んでくれたスーパースター、ハイセイコーのスプリングSの翌日の周辺をス

ナップしてみます。厩舎の雰囲気だせば僕のアイデアとしては成功なのですが。

今日はやってみよう。東府中について競馬場行きの二輛の電車に乗換えた時そう思う。乗客一人乗務員は二人。まあいいや、5月になれば彼らだって忙しくなる。しかしうまくいくだろうか。編集の福田氏におしえられた通りしてみよう。超閑散な競馬場の駅。切符もとりにこない。さていよいよ問題の正門だ。僕は今日ここを素通りしようと思ってる。煙草をくわえてカメラをみえるようにして、真つすぐ前を向いて一歩二歩。どうやら守衛さん何も聞かない。よしやった!! 馬場からの

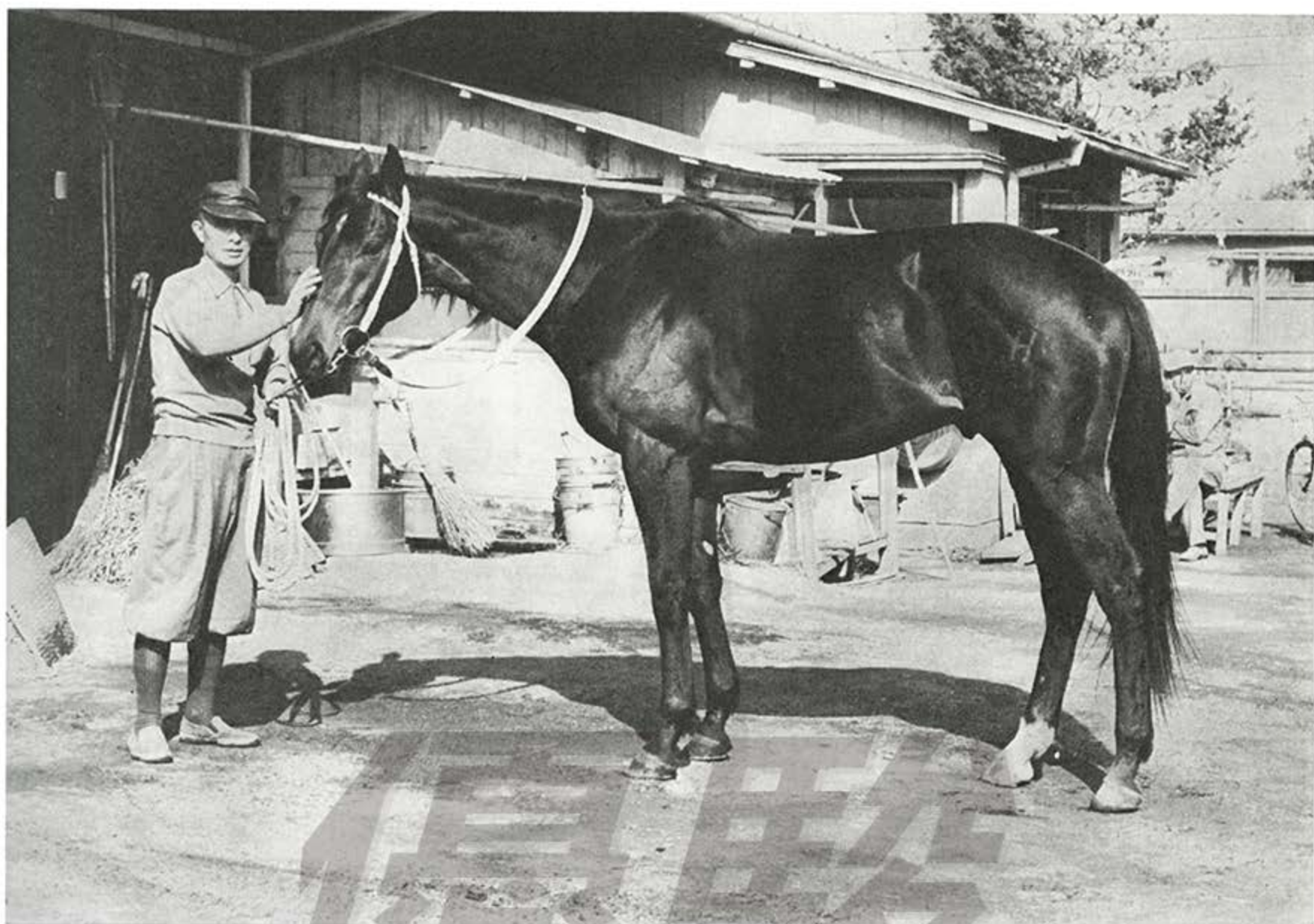
風がこちよ。中門を曲がると厩舎。鈴木厩舎はF5としていたから、約束の時間の遅れもあって運動中の馬を何頭か追い越す。その度にえーとこの馬何だったかな。かつて判ったことなし。内既の一番はずれへ到着。馬房を覗くとおできのすごい馬がいる。隣の棟と間違える。柵を利用した丸太作りの放牧場に四五頭、トウメイだってそうやって育ったんだよ。しかも一人ぼっちで。

にカッターして馬房に投げ入れたら、馬房の前に乾燥したワラを山積している。ハイセイコーはふけをとってもらっている。表情としては気持よさそうだ。「あんな勝ち方心臓に悪くないですか?」他の人が答える。「どんな勝ち方だっていいよこんなだ」片足で立って歌舞伎のみえを切る仕事。「ハイセイコーと大場さんはもう心のふれ合いがあまりあるか?」「普通二歳からみるのに多感な四歳からみると仲間の馬達は一休どんな態度をしますか?」僕は愚問ですがとことわってこんなことを聞いた。「もう馴れました。まだ2カ月だから深くは理解しあえない

けどもう少し時間があればね。馬はね、新入りの当の本人が落着かなくて、回りのものは平然としています」大ベテランの大場さんやさしくおしえてくれる。そこへ「オーイ競馬会の人米てるか!」と大声できたのは鈴木調教師。大場さんが主役です。そういうと「あーそう、じゃいいのね」ちょっとすまない気持。ふけを取り終わったハイセイコーに鞍をつける。「その前に写真を撮りたいんですが」「運動を終えないとこの馬はどんなに暴れるか見当がつかないからそれまでダメです」決死的な覚悟で撮るより30分待とう。「おいお茶でも飲めや」馬房と棟続きの接待室で、定年を3年後に控えた調教師手岸さんが半生を語ってくれた。戦争が競馬人を変えている。馬手の苦勞や待遇、調教の方法、組合や仲間のこと、ためになりました。「ところで岸さんの世話している一頭の馬は何ですか?」「あれはモンタサンの弟だよ、父はソロナウエーだけだね」今四歳で未出走。本当だったらこの馬が鈴木厩舎の一番馬だったかもしれない。ハイセイコーが戻ってきた。「写真撮る人どこいった?」「ハイイここにいます」ポーズをつくるのに一苦労。苦労しているのは馬ではなく僕。なにしろハイセイコーはカメラのためにいちいち動かない。なんとか撮る。「もう結構です」今度は本当に動かなくなった。さんさんひっぱって自分の部屋へ。そうこうしている内に厩舎の隅りに鈴木調教師、



大場さんとは心のふれ合いが……



優駿

ハイセイコーと大場さん

増沢騎手。二、三人の馬手。若いファン。新聞記者などが、ハイセイコーを中心に半円となって話がはずむ。写真機の話をしたり、スプリングSで脚をぶっつけられたことを増沢騎手が皆んなに説明している。TVの蒼白だったインタビュートはムードがちがう。何とも落ち着いた厩舎の昼下がりが。こんな時早月賞はどうですかなんて聞けない。「増沢さんすごくついでますけど?」「ついてるっていえばこの間優駿の人がきてその人、話が全部終わってから私の訪問した騎手はよく落ちるんですけど嫌なことだったなあ」鈴木氏すかさず、「勝負の世界にそりやまずいな」苦笑しながら「しばらく気になってたけど忘れたよ。気にしたらしょうがないもの」9カ月も勝ち鞍のなかったキシニューローレルの梅内厩舎。10年間で一勝したロングエースの田中馬手。今日の大場さんは始めて手掛けた馬が27勝したアラブの名馬ニューバラック。セプターシローもそうだ。数えればこの世界の運、不運の差はきりが無い。そういえば僕もこの所今ひとつだなあ。放牧中の馬がじゃれあって遊んでいる。さてぼちぼち失敬するか。午後乗りはまだ続いている。それをどこからともなく自転車がきて「今日はどうもご苦労さん!!」神出鬼没。笑顔の鈴木調教師でした。ハイセイコーの活躍を心から喜んでいるのは、どうやら鈴木師とみました。